



No.35 2008.06

土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目次			
フォーラム	産業観光によるツーリズム・ニュー	丁野 朗	1
地域のニュース	選奨土木遺産「堀江水準標石」の認定記念式典に参加して	高橋 悦子	3
	錦帯橋国際シンポジウムの意義	岡崎 賢治	4
文化財ニュース	文化財となった土木関連建造物等一覧	北河 大次郎・阿部 貴弘	5
学会の動き	『第28回 土木史研究発表会』開催のお知らせ	土木史研究委員会	6
土木史関係図書		横松 宗治	8

フォーラム 産業観光によるツーリズム・ニュー

社団法人 日本観光協会総合研究所長 丁野 朗

新たな顧客価値を探せ

40年ぶりとなる観光立国推進基本法の改定に続き、今年10月には新たに観光庁が発足する。観光は21世紀のリーディング産業と言われて久しいが、その体制は、今ようやくにして整いつつある。しかし、海外顧客誘致の派手なインバウンド政策の影で、国内の観光地はどこも低迷している。特に有名観光地といわれてきた地域の落ち込みが激しい。何故なのか。その原因は多岐にわたるが、その最たるものは顧客価値とのミスマッチにあると考えている。

観光地域が再び脚光を浴びるためには、多様化する顧客価値の原点に帰ることが重要である。人は何故旅をするのか。旅に何を求め、旅先の何に感動するのか。企画大量商品を造成してきた観光業界にとって、この当たり前のことが時々おろそかになっていないか。

まだ雪の残る3月、北海道の釧路を訪ねた。釧路と言えば釧路湿原、丹頂鶴、幣舞橋、日本有数の漁港に隣接したフィッシャーマンズワープMOOなどが連鎖的に思い浮かぶ。平成17年の年間観光客は255万人。国際チャーター便の増加などで海外客は少しずつ増加しているものの、ここ数年はほぼ横ばい状態が続いている。特に秋季から冬の観光客が低迷し、「冬季観光キャンペーン」や「946(くしろ)味覚フェア」などの需要喚起に取り組んできた。

その一環として5年前から「魚河岸ツアー(秋刀魚編・アキアジ編)」、「釧路炭鉱見学体験」「釧路港・製紙工場見学体験」といった体験ツアーに取り組んでいる。魚河岸ツアーは、釧路漁港の早朝の魚の水揚げやセリの風景を見学し、近くの食堂で自ら焼い

て食べるという単純ながら感動の体験ツアーである。午前7時からプログラムなので観光客は必ず前泊する。毎日見慣れた魚だが、魚市場の迫力のあるセリ風景は新鮮な驚きであり、旬の魚をその場で焼いて食べるという印象が忘れられない思い出となる。

同じく炭鉱見学では、わが国で唯一営業採掘している海底300mの釧路炭鉱に入坑し、露出する石炭にふれる。ズリ(ボタ)山登山や貯炭場での石炭運搬、船への積み込み作業なども体験する。運営会社の釧路コールマインに安全技術を学びに来ている海外留学生との交流や構内食堂での食事は、従来の観光では味わえない体験となる。市内の滞在型修学旅行メニューとして学生の受け入れも開始した。石炭をみて、これを何に使うのかも知らなかった子どもたちにとっては大発見の旅である。

旅は癒しとともに究極の学びや発見の場である。だから事前の学習機会が重要となる。自分の趣味やテーマに拘る人々は、その興味を増幅させてくれる機会を求めている。企画展示で刺激的なテーマを追いかける博物館、面白そうなタイトルの文化講座、映画でみた気になるシーンや風景。これらの追体験ができれば、旅の機会はずっともっと増えるだろう。

「テーマ旅」の時代に相応しい多様な旅の窓口を発掘し、これらを実際に旅に結びつける仕組みづくりなど、旅行業界でも新しい流通チャネル開拓への働きかけが期待される。「新しい酒は新しい皮袋に」という、まさにツーリズム・ニューが求められているのである。

ツーリズム・ニューのための5つの視点

しかし「ニュー」の対極には「オールド」もある。

だから改めて「ニュー」の意味や意義が問われている。そこで、近年の新しいツーリズムに共通する5つのキーワードを提案したい。

その一つは、すでにふれた旅人の「顧客価値」のニューである。30年間、人々の余暇活動や市場を定点観測している「レジャー白書」では、現代人が余暇に求める価値として、「健康・自然」「交流」「自分磨き」「地域活動（社会性）」のキーワードを抽出した。大自然の生態を学ぶエコツーリズムや農的ライフを楽しむグリーンツーリズム、趣味仲間との交流を楽しむクラブ型ツーリズム、産業や都市の歴史を学ぶヘリテージ（産業遺産）ツーリズム、地域の景観やまちづくりなどに参画する喜びを味わうボランティア活動の旅などの人気は、こうした人々の価値感の大きな変化を象徴している。

二つ目は、「観光資源」のニューである。名所旧跡や寺社仏閣だけが観光資源ではない。人々の価値の対象となる全てのものが観光資源となる時代だからこそ、多様な地域資源の中で、何が人々の感動や交流の源になるかを見抜く力が求められている。土木遺産をはじめとする地域の近代化遺産なども、新しい魅力資源である。

しかし、三つ目には、その資源を編集する「視点」のニューが大切である。新しい観光づくりとは、詰まるところ時代の価値感や顧客価値（カスタマーバリュー）を反映した新しい文化装置や仕組みをつくる行為のことである。

そして四つ目のニューは、これらを事業として成立・持続させるための「事業手法」のニューである。ホテルやレジャー施設など個々のビジネスモデルも大切だが、ここでは観光地域全体のビジネスモデル、つまり「地域ビジネスモデル」が重要である。観光の受け皿となるコーディネート組織や事業を運用するコンソーシアム組織、事業を資金面から円滑に推進させる地域ファンド、地域共通の情報ポータルサイトの構築、循環バスなど二次交通の整備、そして同じテーマや資源を共有する他地域との連携といった事業とその手法のことである。

そして何より大切なのは五つ目の「人材」のニューである。これまで観光とは観光業者だけが係わるものと考えられてきた。しかし魅力ある地域づくりやイノベーションを喚起するためには、地域の産・学・官・民など多様な人々の「協働」が不可欠であ

る。特に、ニューツーリズムの資源（コンテンツ）は専門性が高く、これらをインタープリテーション（解説）し、ガイドできる人材がいなければ「顧客価値」のニューにはつながらない。

土木遺産をどう活かすか

本フォーラムの第34号の伊東先生のコラム、「産業遺産と比べ土木遺産はなぜ出遅れているのか？」を拝読した。ご指摘のとおりで、景観を含め地域のランドマークとなり、住民からも親しまれている都市・土木遺産の活用が何故出遅れているのかの理由がよく理解できた。もとより産業遺産の多くは企業や個人所有による活用の容易さの半面で、簡単に破却されるという大きな悩みも抱えている。産業・土木といった分野の違いを超えて、その全体を貫く地域ストーリーとその活用を図るビジネスモデル確立の必要性を改めて強く感じた次第である。

言うまでもなく産業や土木遺産は地域を特色づける最も重要な資源である。これらは地域の産業や都市発展の歴史とともに生成されてきた。産業は地域固有の資源や立地条件を活かし、技を磨き、人を育て、広範な地域とのネットワークを形成することによって発展してきた。同時に、その集積が都市を発展させ、固有の地域文化を生成・発展させてきたのである。その意味で、今日の先端産業も含めて、産業・土木資源は、まさに当該地域を特長づけるかけがえのないオンリーワン資源なのである。これら資源には工場や工房等の建造物や機械・設備等といった生産財、港湾や道路、河川などの都市の多様な土木インフラなど「目に見える」ハード資源から、技術・技能、さらには工場等の集積する独特の景観、産業製品に結実したデザインや意匠、地域の風土（産業精神など）や人材資源等に至るまで極めて多岐にわたっている。

産業観光とは、こうした資源の意味・価値・面白さを編集することによって新たな人的交流（観光）を生み出すツーリズム形態のことである。同時に、これらは欧州の諸都市の例に見られるように、地域再生や新たな産業創造のための手法としても大きな注目を集めている。いま産業遺産や土木遺産という枠を超えて、これらを都市再生やまちづくり、さらには「まちづかい」の資源として活用していくための、地域ぐるみの仕組みづくりが求められている。



釧路漁港のセリ風景
(釧路市提供)



釧路太平洋炭鉱の入坑風景
(同左)

地域のニュース

選奨土木遺産「堀江水準標石」の認定記念式典に参加して

(株) 地域開発研究所 高橋 悦子

「堀江水準標石」

「堀江水準標石」は、オランダ技師リンドが明治5年(1872)に設置した近代日本の最初の水準測量の標石のひとつである。平成19年度の選奨土木遺産に浦安市観光協会が応募し、選定された。

選奨土木遺産の認定に当たっては、記念イベントを開催することが条件になっている。記念イベントとして、浦安市観光協会は、平成19年(2007)12月10日に「認定授与式と記念講演会」を開催し、さらに、観光キャンペーンも兼ねた「堀江水準標石お披露目会」を平成20年(2008)2月6日に行った。

1. 「認定授与式と記念講演会」

認定授与式は、浦安市の松崎秀樹市長をはじめ、市議会議員を中心に、浦安市とマスコミ関係者、オランダ大使館のミヒール・デ・ライスター参事官が出席し、参加者は80名を超え、盛況だった。

まず、主催者の挨拶の後、土木学会関東支部選奨土木遺産支部選考委員会の小方武雄委員長から「堀江水準標石」のある清瀧神社の家原國彦宮司へ認定証が授与された。

続いて、(財)地図センター研究第二部 箱岩英一部長から「日本の水準測量の歴史における堀江水準標石」と、国土交通省江戸川河川事務所の北村匡所長から「リンド技師と堀江水準標石」の講演があった。二人の講演者は、堀江水準標石の意義を分かりやすく解説された。

2. 「堀江水準標石お披露目会」

2008年2月6日、寒い雨の降る天気にもかかわらず、ローカルテレビのカメラも入り、境内は多くの人で賑わっていた。

「堀江水準標石」が清瀧神社の境内にあることから、家原宮司よりおごそかに神事が執り行われた。

お披露目会にも認定授与式と同様、松崎市長、ライスター参事官が出席され、浦安市・オランダ大使館ともに、堀江水準標石に対し、今後に期待していることが伺えた。

写真-1
お披露目式で挨拶する
浦安市長・松崎秀樹氏
(中央)
(2008年2月6日撮影)



3. 選奨土木遺産になって

選奨土木遺産になったことで、「堀江水準標石」は、浦安市の広報誌、朝日新聞、読売新聞、千葉日報、東京新聞、各紙にイベントが開催されるたびに、掲載された。

清瀧神社関係者の間では、浦安市の文化財担当部局に対し、浦安市の文化財指定を希望していたが、指定には至らなかった。今回、土木学会で選奨土木遺産に認定していただけたことで、地域に認知されることとなり、保存・活用に向けた新しい一歩を踏み出した。

土木遺産に認定される前の写真と認定後の写真を比べていただきたい。認定前の状況を見ると、この石の意味を知らせる説明板もなく、このまま忘れられ、いつ、埋められたり、捨てられたりされてもおかしくない状態だった。

土木遺産認定にあたり、清瀧神社の家原宮司をはじめ、氏子の方々もとても喜んでいらっしゃった。

これからも多くの方々に「堀江水準標石」の存在を知っていただき、次世代に受け継いでいかれることを願っている。



写真-2 整備される前の「堀江水準標石」
(2006年11月2日撮影)



写真-3 選奨土木遺産認定後、説明板と共に整備された「堀江水準標石」
(2008年2月6日撮影)

(連絡先tel. 03-3831-2917

HP : <http://www.rdco.co.jp/>)

錦帯橋国際シンポジウムの意義

岩国市農林経済部観光課 岡崎 賢治

はじめに

国の名勝に指定されている錦帯橋は、山口県最大の河川であり岩国市の中心部を流れる錦川に架かっている。今から 335 年前の延宝元年(1673)10 月、萩藩岩国領第三代領主吉川広嘉により創建された 5 連の木造橋(中央 3 連がアーチ構造、両端は反りを持つ桁橋構造)である。(写真 1)

昭和 25 年 9 月に発生したキジア台風により流失しているが、再建時に石積橋脚から表面石張りの鉄筋コンクリート橋脚に変更し、今後の洪水を考慮して四基の橋脚のうち中央二基が 1m 嵩上げ(両サイドは中央より -30cm)された。

国際シンポジウムの開催

岩国市では「錦帯橋と岩国の町割」を世界遺産暫定一覧表掲載資産として提案しているが、架け替えを行っていることによる材料の真実性の低さが指摘され、国内外の専門家との合意形成に向けた努力が求められた。そのため、平成 20 年 1 月 27 日に国際シンポジウムを開催することとし、タイトルを「木造文化の粋ー錦帯橋の真実性(Authenticity)を問う!ー」とした。(写真 2)

海外からお招きしたフランスのミシェル・コット氏は、現在、イコモス(ICOMOS:国際記念物遺跡会議)のアドバイザーをされており、世界遺産であるビスカヤ橋(スペイン)、オランダの風車、ミディ運河(フランス)といった資産の調査に携わられ、登録に関して大きな影響力を持っている方である。

技術遺産における真実性と完全性

2006 年に世界遺産登録されたビスカヤ橋(写真 3)について講演されたが、非常に興味深い内容であった。ビスカヤ橋は、スペインの主要都市であるビルバオのイバイザベル川河口に位置し、1888 年から 1893 年にかけて設計・施工が行われた世界最初の運搬橋である。完成から現在まで 115 年経過しているが、その間、数点の改良(技術革新)が行われているのである。

まず、水平のトラス桁は 1937 年の内戦で破壊され 1941 年に再建されているが、当初より少し高くなっている。また、人や車を運ぶゴンドラは、当初は鉄の板に柵を設けただけのものであったが、現在は乗客の居住性を考慮して 2 つの客室が設けられ、アルミニウム製となっている。このゴンドラを動かす動力も、蒸気エンジンから電力へと変更されている。これらのことから、ビスカヤ橋は真実性が低いとされている。

しかしコット氏は、ゴンドラを除けばオリジナルの構造と材料(ケーブル、橋脚)を尊重しており、動力源の変更は包括的な技術革新であることから、真実性という評価の枠に収まっていると主張された。さらに、橋の一生にとって技術の発展は宿命的なものであり、改良と技術革新があつてこそ機能するのであり、ビスカヤ橋や錦帯橋などの技術遺産は、技術が革新されていくことに価値がありその部分を正当に評価するべきであると言われている。また、評価における重要な要素として完全性(Integrity)を挙げられた。

完全性には、構造デザインの完全性、機能の完全性、社会的利用の完全性などがあり、形自体が同じものであるか、最初に使われていた技術が今も使われているか、利用目的が変わっていないか等である。また、橋のマネジメントとして保存・保護する仕組みも確立されていることなどから、ビスカヤ橋は橋本来の意味と技術が十分に尊重された生きた遺産であると結論付けられた。

錦帯橋は架け替えられているため創建当時の材料が残されていないことや、昭和の再建工事で加えられた改良もマイナス要因として考えられていたが、ビスカヤ橋と同じく技術の革新をもって諸問題を解決し、技術を伝承しながら歴史を繋いできたことは、技術遺産として評価される可能性を示すものであった。また、完全性の三点に関しても肯定的な回答ができることから、世界遺産登録を目指す岩国市にとって非常に意義深いシンポジウムであった。



写真 1 錦帯橋



写真 2 錦帯橋国際シンポジウム



写真 3 ビスカヤ橋

文化財ニュース

文化財となった土木関連建造物等一覧

重要文化財 平成20年4月答申分

所在地		名称	建設年代	特徴等
京都府	舞鶴市	舞鶴旧鎮守府倉庫施設	M36	舞鶴海軍兵器廠の武器倉庫4棟(魚形水雷庫、予備艦兵器庫、弾丸庫並小銃庫、雑器庫並預兵器庫)及び需品庫3棟よりなる。海軍舞鶴鎮守府開庁時に整備された倉庫施設で、海軍鎮守府の施設構成を理解する上で重要。また魚形水雷庫は、現存最古級の鉄骨造建築であり、建築技術史上、高い価値がある。
大阪府	大阪市	淀川旧分流施設	M40ほか	内務省による淀川改良工事の一環として、土木監督署技師沖野忠雄の計画に基づき建設された毛馬洗堰、毛馬第一閘門を中心とする施設。我が国最初期の高水工事であるとともに、初めて大型建設機械を導入して実施された淀川改良工事の代表的遺構として、近代河川史上、高い価値がある。毛馬第二閘門と淀川改修紀功碑も併せて指定される。

登録有形文化財 平成19年12月答申分

所在地		名称	建設年代	特徴等
福島県	福島市	地蔵原堰堤	T14 ／S28改修	阿武隈川の支流である荒川に築かれた砂防堰堤群。阿武隈川改修工事の一環として、大正末期から昭和期にかけて建設され、いずれも躯体は表面石積の重力式コンクリート造とする。地蔵原堰堤は、荒川下流扇状地の扇頂部に位置し、基幹的役割を担う。これより上流に、荒川第五、第一、第六、第二、川上第一、荒川第七、第八、第三堰堤と連続して築かれており、土湯の温泉街や福島市街を土砂災害から守っている。
		荒川第五堰堤	S29 ／S48増設	
		荒川第一堰堤	S12	
		荒川第六堰堤	S25	
		荒川第二堰堤	S13 ／S16増設	
		川上第一堰堤	S21	
		荒川第七堰堤	S26	
		荒川第八堰堤	S27	
		荒川第三堰堤	S15	
埼玉県	本庄市	寺坂橋	M22	関東には珍しい明治期の石橋。起拱部付近に五角形の迫石を用いるのが特徴的。
		賀美橋	T15 ／H18改修	高欄の白タイル貼の連続アーチや、親柱の装飾などが特徴的なRC橋。
	本庄市 深谷市	滝岡橋	S3	60ftのプレートガーダーを用いる鋼製8連桁橋。橋台は煉瓦を曲面状に積む丁寧なつくり。
新潟県	佐渡市	旧佐渡鉱山大立堅坑櫓	S15	旧佐渡鉱山の関連施設。大立堅坑櫓は、採鉱・貯蔵・搬出の一連の工程を担う中心的施設で、付随する捲揚室は堅坑櫓背面の岩盤内にRC造で築かれる。道遊坑は、主要坑道の一部で、坑口は二重アーチとする。二基の単アーチ橋は、石造で、スパンドレルに人造石を用いる特徴的なつくり。
		旧佐渡鉱山大立捲揚室	S13頃	
		旧佐渡鉱山道遊坑	M末期 ／S前期増	
		旧佐渡鉱山間ノ山下アーチ橋	M37	
		旧佐渡鉱山間ノ山上アーチ橋	M末期	
岡山県	総社市	JR伯備線美袋駅駅舎	T14	桁行9間、梁間3間規模の陰陽連絡線の駅舎。T末期の官鉄標準駅舎の好例。
高知県	四万十町	里川橋	S29	四万十川に架かる橋長84mのRC造13連桁橋。高欄を設けず、縦断面を緩やかな凹形とする沈下橋の好例。
		北の川口橋	T8	橋長18mの石造単アーチ橋。スパンドレルに精緻な布積を施す。高知と宇和島を結ぶ旧幹線道路施設。
		旧大正林道佐川橋	S19	橋長82mのRC造3連アーチ橋。アーチのスパンは最大で30mとする。旧大正林道を代表する大規模橋梁。
		木屋ヶ内橋	S28	橋長27mのRC造4連桁橋。上流側の水切りを鋭角につくり、桁の両側面を曲面状とするなど丁寧なつくり。
		旧大正林道木屋ヶ内トンネル	S19	延長138mの直線状のコンクリート造隧道。旧大正林道で最長のトンネル。
		旧大正林道柿ノ木サコ橋	S19	橋長7.0mのRC造単アーチ橋。表面にモルタルを用いず、コンクリート打放とする。
		旧大正林道ユス谷川橋	S19	橋長8.0mのRC造単アーチ橋。橋原川沿いに築かれた旧大正林道関連施設。
		ユス谷川橋	S10頃	橋長8.2mの単アーチ橋。アーチを煉瓦積、スパンドレル等を切石積とする。
		大正橋	S3	150ftのワーレントラスを用いた橋長138mの道路橋。橋原川に架かる最大の近代橋梁。
鹿児島県	鹿児島市	鹿児島旧港北防波堤灯台	S9	RC造の旧ガス発生室の上に、鉄骨造灯塔を付ける総高11mの構造物。鹿児島港修築工事の代表的遺構の一つ。
	日置市	九州電力大田発電所本館	M41 ／S28改修	桁行15m、梁間12m規模の石造平屋建。島津家の経営に係る鉱山に関連する水力発電所施設。

登録有形文化財 平成20年3月答申分

所在地		名称	建設年代	特徴等
京都府	宮津市	撥雲洞トンネル	M19	栗田峠に築かれた延長126mの隧道。京都宮津間車道開鑿工事の一環として築かれる。
大阪府	高石市	伽羅橋	慶応元 ／S63移設	花崗岩を用いた橋長11mの石造3連桁橋。幕末の主要街道（紀州街道）に築かれた道路橋の一つ。
兵庫県	丹波市	旧上久下村営上滝発電所	T11	桁行9.2m、梁間6.5m規模の煉瓦造2階建。村が独自に建設・運営した近代水力発電施設。
島根県	松江市	千本貯水池堰堤	T7	忌部川の上流に位置する水源地施設。山陰初の水源地用コンクリート造堰堤である貯水池堰堤と、4連アーチ式の管理橋よりなる。
		千本貯水池堰堤管理橋	T7	
		忌部浄水場旧弁室及び着水井	S4	貯水池堰堤より約500m北東に位置する。貯水池より送られる原水が着水し、量水を行う旧弁室及び着水井、着水井から濾過池へ原水を分配するために設けられた導水溝及び放水井、東西22m、南北31m規模の長方形平面とした濾過池6所、各濾過池から濾過水を集める集合井よりなる。放水井、3号から6号までの濾過池は水道創設時の施設で、その他は第1拡張工事の際に建設されたもの。濾過池は、底部に細砂、礫、煉瓦を敷き詰めて原水の濾過を行い、池中央の縦溝に水を集める緩速濾過池で、各池の北側には半円形又は円形平面で意匠を凝らした上屋付の調整井を配する。
		忌部浄水場導水溝及び放水井	T7・S4	
		忌部浄水場一号濾過池	S4	
		忌部浄水場二号濾過池	S4	
		忌部浄水場三号濾過池	T7	
		忌部浄水場四号濾過池	T7	
		忌部浄水場五号濾過池	T8	
		忌部浄水場六号濾過池	T8	
		忌部浄水場集合井	S4	
		旧床几山配水池	T6	忌部浄水場より約3.5km北方に位置する床几山の山頂に築かれる。東西37m、南北32m規模のコンクリート造の配水池、市街地へ配水する水道水を計量する計量室、敷地東端部の表門よりなる。
		旧床几山配水池計量室	T6	
		旧床几山配水池門	T6	
鹿児島県	指宿市	宮ヶ浜港防波堤	天保5	折曲り延長220m、く字形平面とした石造構造物。江戸末期に遡る大規模石造防波堤。

学会の動き

『第28回 土木史研究発表会』開催のお知らせ

- 主 催：土木学会（担当：土木史研究委員会 <http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/index.htm>）
- 期 日：【研究発表会】2008 年7 月5 日（土）・6 日（日）【見学会】2008 年7 月4 日（金）
- 会 場：九州大学 西新プラザ（福岡市）
九州大学 西新プラザHP
<http://www.kyushu-u.ac.jp/university/institution-use/nishijin/index.htm>
交通案内：福岡空港から地下鉄「姪浜」行き乗車 約20分
博多駅から 地下鉄「姪浜」行き乗車 約15分
→いずれも、「西新」駅下車、⑦番出口より徒歩約10分
- 参加費：会員・非会員：2,000 円、学生会員：1,000 円
論文集および講演集販売：合冊（論文集＋講演集）：6,000 円
論文集のみ：2,000 円 講演集のみ：4,500 円 ※当日会場にて申し受けます。
- 懇親会：日 時：2008 年7 月5 日（土） 18:00 ～
- 見学会：日 時：2008 年7 月4 日（金） テーマ：未定

『第28回 土木史研究発表会』プログラム

◆7月5日（土）（1／2）10：00～12：00

時間	第1会場	第2会場
10:00	開会挨拶 土木史研究委員会委員長 小西 純一	
10:20	【教育・人物】	【河川Ⅰ】
	五高・熊本高等工業学校における土木技術者教育に関する研究 山中 孝文(熊本大学)	佐賀平野における流域治水に関する研究 岸原 信義(佐賀大学)
	東京大学第二工学部土木工学科における教育 泉 知行(東京大学)	嘉瀬川と緑川における伝統的治水技術の比較研究 大串 浩一郎(佐賀大学)
	朝鮮総督府における韓国土木技術者の仕事 崔 静妍(東京大学)	嘉瀬川・石井樋の水システムに関する考察 吉村 伸一(株式会社吉村伸一流域計画室)
	電力土木史の歴史-第2編電力土木人物史(その21) 稲松 敏夫(稲松技術士センター)	多布施川を中心とした佐賀の水供給システムに関する研究 島谷 幸宏(九州大学)
12:00		

◆7月5日(土)(1/2) 14:00~19:30

14:00	【土木遺産・資料】	【河川Ⅱ】
	土木構造物に係る遺産的価値に関する考察 田中 尚人(熊本大学)	裂田溝における歴史的水利構造物の再評価に関する研究 渡辺 亮一(福岡大学)
	ビスカヤ橋に見る技術遺産としての歴史的橋梁の評価に関する一考察 本田 泰寛(熊本大学)	天草棚底地区における農業用地下水路の調査研究 井口 直(熊本大学)
	「土木図面の史料性に関する調査研究」について 五十畑 弘(日本大学)	角倉了以の保津川航路開削時に設置された「水寄せ」に関する調査(第二報) 浅野 貴弘(関西大学)
	土木技術史料としてのダム建設記録映像の評価に関する基礎的研究 馬淵 浩一(名古屋科学館)	応其上人に関する研究 西山 孝樹(日本大学)
15:40		
16:00	【土木遺産】	【河川Ⅲ】
	100年前の煉瓦を再利用した旧曾木発電所遺構保存工事 丸田 洋二(清水建設株式会社)	黒部川における洪水発生時の霞堤の機能実績に関する研究 寺村 淳(セブン・イレブンみどりの基金 九重ふるさと自然学校)
	朝鮮半島の城 田中 邦熙(財)日本城郭協会)	沖野忠雄内務技監の1917(大正6)年天津派遣について 神吉 和夫(神戸大学)
	東大寺大仏殿の宝永再建経緯と石垣に関する研究 土橋 正彦(大阪産業大学)	日領初期の台湾河川治水事業と土木技師十川嘉太郎の貢献について 黄 俊銘(台湾中原大学設計学院)
	水戸藩小石川屋敷について 藤尾 直史(東京大学総合研究博物館)	南山城・木津川支川天井川の形成と切下げに見られる治水意識の変遷 安東 尚美(NPO法人流域調整室)
17:40		
18:00	懇親会	

◆7月6日(日) 9:00~16:05

時間	第1会場	第2会場
9:00	【構造Ⅰ】	【都市Ⅰ】
	ボースリングトラスの復元事例の紹介 大石橋からりんどう橋へ 木下 潔(松尾エンジニアリング株式会社)	関東大震災における避難行動と避難場所の分析 西村 悠典(板橋区)
	古構造学的視点から見たスガントイブ吊橋の由来 小林 一郎(熊本大学)	江津湖を対象とした北村徳太郎の都市計画思想に関する一考察 本田 百合絵(熊本大学)
	ふるさと銀河線(旧池北線)における橋梁について 宮森 保紀(北見工業大学)	旧北海道庁による北海道総合計画(1940)に関する研究 今 尚之(北海道教育大学)
	我が国における明治期の近代的本造吊橋構造の展開(その6) 一大井川水系における人道釣橋の変遷— 山根 巖(中部橋梁調査研究所)	岡山市の市役所筋のセットバックに関する歴史的研究 木村 友季(岡山大学)
10:40		
11:00	【構造Ⅱ】	【都市Ⅱ】
	増田淳の橋梁設計手法と設計思想に関する研究 加賀 晃次(徳島大学)	洞海湾における歴史の変遷と森造りによる環境保全の取り組みについて 安田 繁(九州共立大学)
	御茶の水橋の橋種・型式選定の考え方 白井 芳樹(株式会社 オオバ)	石狩湾新港の歴史の変遷 — 建設位置と港湾形状の決定について — 神代 方雅((株)クマシロシステム設計)
	東京市施工による震災復興橋梁の事業執行実務に関する研究 埜中 隆晃(セントラルコンサルタント株式会社)	瀬戸内における産業風景の重層性 岡田 昌彰(近畿大学)
	アンコール時代の石橋について 松村 博	明治以降の上賀茂社家町における水路網と池の変遷 林 倫子(京都大学)
12:40		
14:00	【交通】	【水路・用水】
	古道の災害時活用に関する一考察 中根 洋治(昭和コンクリート工業(株))	水路都市岡山の近世—西川用水前史 小野 芳朗(岡山大学)
	明治時代における長野県の道路行政について(その3) 山浦 直人(長野県)	横浜市内における水道水源林の研究 飯岡 宏之(横浜市立大学)
	明治初期の鉄道開通による群馬県における物流交通手段の変化について 西尾 敏和(群馬県立高崎工業高等学校)	札幌における水辺の機能とその変遷に関する研究 岩田 圭佑(熊本大学)
	石炭輸送のための室蘭駅における水陸連絡設備の推移に関する考察 高津 俊司(独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構)	
15:40		
16:05	総括および閉会挨拶 土木史研究編集小委員会委員長 松村 博	

書名	著者・編者	発行所・発行日	定価(税込)
舟運都市 水辺からの都市再生	三浦裕二・陣内秀信・吉川勝秀編	鹿島出版会・2008年2月	¥ 3,150-
河川運河の都市の世界の事例を通して都市の歴史と将来を展望する。			
中国都市への変貌 悠久の歴史から読み解く 持続可能な未来	ジョン・フリードマン著 谷村光浩訳	鹿島出版会・2008年1月	¥ 2,940-
都市論の巨匠ジョン・フリードマンの中国都市史。			
モダン都市の系譜 地図から読み解く社会と空間	水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著	ナカニシヤ出版・三修社・2008年5月	¥ 2,940-
京阪神の地図と景観のなかに都市空間の権力諸相を読み解く。			

(APECLAND(HONGKONG) 横松宗治)

編集後記

世界遺産ブームといわれる今日、産業遺産や土木遺産にも目が向けられるようになってきています

しかし、堀江水準標石のように小さな構造物は人の目につかず忘れ去られ、いつかは撤去される運命にあるように思えます。今回のように土木学会が選奨土木遺産として認定したことは大きな意義があったように思います。

みなさんの周囲にも、このような忘れ去れた(そうな)土木構造物があれば、学会の選奨土木遺産に公募し、1つでも多くの土木構造物が選奨され、末永く世に残っていくことを考えてはどうでしょうか？(伊納)

公募サイト(土木学会HP 土木学会選奨土木遺産を参照)
<http://www.jsce.or.jp/committee/doboku-isan/koubo.htm>

土木史フォーラム No. 35

監 修：土木学会土木史研究委員会

発 行：土木史フォーラム小委員会
 代表者 藤井 三樹夫 (榊水環境研究所)

事務局：伊納 浩 (榊地域開発研究所)
 TEL.03-3831-2844 FAX.03-3831-2620
 Email : inou@rdco.co.jp

土木史フォーラムHP
<http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/forum/>

印 刷：(株)青孔社

CONTENTS

-FORUM

- The Tourism New by the industrial tourism CHOONO Akira 1

-LOCAL NEWS

- Report on the recognition commemorative ceremony of the Horie level stone marker as the recommending civil engineering heritage TAKAHASHI Etsuko 3
- The significance of the Kintai Bridge international symposium OKAZAKI Kenji 4

-Civil Engineering Works on Latest Heritage Registration List

- KITAGAWA Daijiro and ABE Takahiro 5

-REPORT FROM CHSCE(Committee on Historical Studies in Civil Engineering)

- Call for papers of the 28th Annual Meeting of CHSCE (CHSCE) 6

-BOOK GUIDE

- YOKOMATSU Muneharu 8